並立助詞「と」と「や」に関する一考察

市 川 保 子

1. はじめに

本稿で考察しようとする並立助詞「と」と「や」は，外国人学習者向けの日本語教科書では，初級の，それもかなり早い課で取り上げられる項目である。

次にかかげるのはジョーデンの『Japanese : The Spoken Language』[1] の「と」についての文法説明の一部である。

> In this section, We introduce the phrase-particle **to** as a connector of the immediately preceding nominal to a following nominal : /nominal A+nominal B/='B with A', i.e. 'A and B'.

同じく「や」については次のように説明されている。

> /Nominal A + **ya** + nominal B/='A and B and others of a similar kind', 'A and B and so on', 'A and B among others', 'items like A and B'.

ジョーデンの文法説明では，「と」と「や」が名詞と名詞を結ぶ働きを持つこと，「や」には，「や」で結ばれたもの以外にも同じ様なものがまだあることを意味すると示されており，これらは日本語教科書に共通して見られる説明だと言える。

しかし，次のような留学生Jの作文を見ると，上記の，特に「や」の説明では不十分ではないかという気がしてくる。(以降留学生の作文は原文のまま)

(1) 日本人について，私におどろかすことは日本人の比較的な宗教の欠乏である。日本に神社とお寺がたくさんあるのに，そんなところは結婚

式や葬式のための施設だけらしいだと思う。

（1）には種々の誤りが含まれているが，日本人が書き直せばおおよそ次のようになろう。特に，下線の部分を注意していただきたい。

（1）' 日本人について私がおどろくことは，日本人にはかなり宗教心が欠乏しているという点である。日本には神社やお寺がたくさんあるが，そういうところは結婚式や葬式のための施設でしかないらしい。

留学生Jは，下線部に示された並立助詞「と」「や」は両方知っており，（1）では自分なりに使い分けて「神社とお寺」「結婚式や葬式」と書いたと言う。

「自分は日本人の神社・寺に対する考え方が不思議で，「神社と寺」のことのみを取り上げたのである。そしてそこがなぜ専ら「結婚式や葬式（及びその他の行事）」に使われているかを知りたかった。」と言うのがJの主張である。

Jの頭の中では，「と」はそこにあげられたものがすべてであり，「や」はいくつかあるもののうち2，3を例としてあげ，それ以外にも同類のものがあることを示唆する並立表現としてとらえられていて，それは日本語教科書の説明通りで正しいのだが，日本人としては「神社とお寺がたくさんあるのに」ではなくて，「神社やお寺がたくさんあるのに」にしてほしいところである。

（2） 日本人は正月に神社とお寺に行く。

これもJが作った文で，ほとんどの日本人は「神社とお寺（だけ）」に行くのであって，自分としては教会へ行く人のことは含めていないのだから「神社やお寺」ではないと主張する。しかし（2）は日本人が正月に神社と寺両方に行くという意味になって，日本人なら（2）'にしたいところである。

（2）' 日本人は正月には神社やお寺に行く。

次の（3）は留学生Eの作文の一部であるが，これらも日本人にとっては少し首を傾げたくなる「と」の使い方で，（3）'のようにしたいところである。

（3）でも今は日本の生活と日本人にもっと慣れてきて，日本の社会と日本

人の考え方を理解しはじめたので前の不思議なことがそんなに不思議ではなそうになった。

（3）’しかし今は日本での生活や日本人にも慣れ，日本の社会や日本人の考え方が理解できるようになってきたので，以前の不思議なことがそんなに不思議でなくなってきている。

留学生Eは，「日本の生活と日本人」に慣れてきて，「日本の社会と日本人の考え方」がわかり始めたのであるから，「や」でなく「と」であると主張する。

（4）　a．机の上に鉛筆とノートがある。
　　b．机の上に鉛筆やノートがある。
（5）　a．スーパーで人参と大根を買った。
　　b．スーパーで人参や大根を買った。

(4a) は机の上にあるものは鉛筆とノートがすべてであり，一方，(4b) では鉛筆とノート以外にもものがあると想像される。同じく (5a) では買ったものは人参と大根がすべてであり，(5b) では，人参，大根以外にも何か買ったと想像できる。

しかし（4）（5）以外に，留学生JやEのように教科書的説明では説明しきれない場合も多い。日本人が行くのが神社か寺かの2つだけでも，また，理解できるようになってきたのが日本の社会と日本人の考え方だけでも，「や」を使うとなると，どのような時に，どのような条件下でそうなるのかを示す必要がある。

本稿は，並立されたものがすべてであり，すべてを列挙するという点では「と」を使うべきなのに「や」を使っている用例を取り上げ，日本人がどの様うな基準で「と」の代わりに「や」を用いているのかを探ることを目的とする。また，それが，外国人学習者にどのような困難点を引き起こしているかについても考えてみたい。

2. 並立助詞と「と」と「や」

『日本文法事典』の並立語の項には次のような説明がある[2]。

……対等の関係にある語や成分を並立せしめる機能をもつ助詞を並立助詞という。並立助詞や対立助詞と呼ばれることもある。「と・や・やら・に・か・なり・の・だの」などがそれで，従来，格助詞・係助詞・副助詞・間投助詞などに所属させていたものを，並立助詞として一類の助詞としたのは，橋本進吉である。……

この説明から「と」「や」は橋本進吉以降並立助詞と呼ばれるようになったが，もともとは意味機能の異なるものであったことがわかる。次の山田孝雄と時技誠記のとらえ方を見ても両者の意味的な違いが想像される。

間投助詞という命名を行った山田孝雄は，「や」をそれに分類した。山田の分類では，間投助詞は語勢を添え，もしくは感動を高めるために用いられるもので，その位置が他の助詞に比べてやや自由なるものをいう[3]。

早く来いや。そんな事はやめろや。
そんな事はすなや。
僕は知らないや。皆で行こうや。
松子や，お使いに行っておくれ。
今は菜種や桜の花盛りです。

山田は「や」に対し「と」は格助詞として位置づけている[4]。

父と語る。　友と遊ぶ。
甲は乙と等しい。
あなたと一緒に参りましょう。
月と花とを賞す。　京都と大阪と長崎へ行く。

時枝誠記は「と」を格を表す助詞，「や」を限定を表す助詞に分類している[5]。格を表す助詞は，事柄に対する話し手の認定の中，事柄と事柄との関係の認定

を表現するものであるから，感情的なものはなく，ほとんどすべてが論理的思考の表現である。

と　茶碗と箸　　友だちと出かける

一方，限定を表す助詞は，話し手の期待，評価，満足等が表現されている助詞で，「か」「は」「も」「や」「さえ」「ばかり」「ぐらい」「でも」「しか」「こそ」などがこれに属する。

や　みかんやりんごがある。あれやこれやと忙しい。

両者の考え方を見ると，「と」は格助詞，「や」はむしろ話し手の心的態度を表す性質をもつと言えそうである。

「と」が格助詞的であるということについて寺村秀夫[6]は，

> 並立助詞としての「と」は，……格助詞の「と」とどこかでつながっていそうである。

として次の例をあげ，「相互作用」の動詞（あるいはそれと同質の形容詞）のとる格助詞「と」と並立助詞「と」とは意味的に近いのではないかと提言している。

（6）　a．光太郎と智恵子が結婚した。
　　b．智恵子が光太郎と結婚した。

次のような例は「相互作用」を表しており，「と」の使われ方としては多く見られるものである。次の（7）は「N（名詞）とN」なのか，「～が～と～を組み合わせる」の補語の「Nと」なのか区別がつきにくいところである。

（7）　油しぼりの機械など，歯車と各種のメカニズムをくみあわせた大規模のものが，すでに一八世紀には出現しております。　（日本）[7]

（8）サメであり，ヒルであり，あの野郎であっても，為政者と記者団の緊張関係があれば，民主主義は機能し，政権の誤りはただされるという信念がトルーマン氏にそういわせたのだろう。（〜が〜と関係する）（天声）

（9）いずれも簡単なことではあるまい。しかしここには，人間と自然が共存することへの，限りない共感がある。（〜が〜と共存する）（天声）

「と」が格助詞に近いということは，格助詞として「体言もしくは体言に準ずる語について，その体言が，文中の他の語に対して，どのような関係にあるかを示す」[8] 性格，言い換えれば論理的な性格を，「や」よりは持つはずである。

3．「や」について

1で見た日本語教科書の説明や，寺村の言う，

「と」がそのセットメンバーすべてをあげるのと違って，「や」は，そのほかにも同類のものがあるという意味を含んでいる。

という説明だけでは，留学生JやEの誤りを説明することはできなかった。外国人学習者の頭の中には次の図式があるようである。

A．日本人は神社とお寺へ行く。 ⇒ a．Japanese people go to shrines and temples.

B．日本人は神社やお寺へ行く。 ⇒ b．Japanese people go to shrines, temples, etc.

（—は外国人学習者のとらえ方，…は日本人のとらえ方）

日本人はBをa の意味にもbの意味にもとっており，B–a の場合が外国人にはむずかしいようである。

ここで問題となるのは，BをB–a ととるか，B–b ととるかの判断の仕方である。たぶん人によっては判断が異なる場合が出てこよう。

いまB–aのような，すべてをあげる「や」の使い方を「すべて列挙の「や」」

と名付けると，筆者が「すべて列挙の「や」」と判断するのは次のような場合である。

(10)　とくにその科学・技術に関しては，ヨーロッパやアメリカの先進国とくらべても，……　(日本)

(11)　国際的には，日本はまだ鎖国をといたばかりで，国際外交の慣例や術策をしらなかったため，気がついてみると，……　(日本)

(12)　日本では，むかしから，全国の神社や寺院に，庶民が絵をかいた額を奉納する習慣がありますが，……　(日本)

(13)　第二次大戦後，民間人を含めて二千百万人以上が戦争や武力紛争で死亡したそうだ。　(天声)

(14)　この投書のことが気になっていたころに，キャッシュカードやクレジットカードを持ち歩く子がいる，という議論が国会であった。
　子どもにかなりのお年玉を与え，高価な遊び道具を与えることは，子をかわいがっているようで実は傷つけている。それがわかっていながら，子や孫の喜ぶ顔見たさについ，となってしまうところがくせものだ。　(天声)

(10) では日本が比べる先進国は，世界的に見てもヨーロッパとアメリカしかないのだから，本来なら「ヨーロッパとアメリカ」とすべきところである。(11) でも当時の日本に必要だったものは「国際外交の慣例と術策」そのものであるから，「や」を用いる必要はないはずである。(12) は留学生Jの考え方と同じ根拠で「全国の神社と寺院」にすべきところである。(13) で「や」を使っているが，「戦争と武力紛争」2つで死亡原因は網羅されると思えるから，やはり本来なら「と」とすべきであろう。(14) では「キャッシュカードとクレジットカード」以外にも，他の種類のカードを持つ可能性はあるかもしれないが（しかし他にどんなカードが考えられるだろう），喜ぶ顔が見たいのは，「子と孫」の顔であって「甥や姪」「他人の子」の顔ではあるまいと思われる。やはり留学生の頭では「と」とすべきところである。

「N1 や N2+述語」による「すべて列挙の「や」」の例に当たっていくと，N1 N2 及び述語，そして文全体にもある種の傾向が見られる。それらの傾向は大きく分けると次のように分類される。

1) N1, N2がとる名詞の性質
2) 「と」と「や」の独立性
3) 述部との関係
4) 動詞の性質
5) 話し手の心的態度

次に上記の1)～5)について検討していこう。

3.1 N1, N2 がとる名詞の性質

「N1やN2」がとる語彙としては，(10)～(14) に見られるように，ヨーロッパ，アメリカ，慣例，術策，戦争，子，孫などのようにだれもが知っており，日本人が共通の知識，社会通念として持っている，「特定」の語が使われやすいと言えるのではないかと思われる。次の用例も特定の語が「や」で結ばれている。

(15) 大統領やレーガン主席補佐官はこの事実を本当に知らなかったのか。知らなかったとすれば，政権の構造に大きな欠陥があったことになる。 (天声)

筆者が採集した「N1 や N2」のいくつかを次にかかげておく。これらを見ているとやはり誰でもが知っている（であろう）同じ性質の語が，対等の資格で並んでいるのがわかる。

人権や自由
恣意や偏見
法律や習慣や礼儀
無知や気まぐれや我がまま
エレクトロニクスやバイオテクノロジー
デンマークやカナダ（の農業）
茶道や華道
電車やバス
ナチスの残虐行為や強制収容所のこと

「すべて列挙の「や」」が特定の語を取りやすいということと関係して，それらの特定の語には上位概念の語が多いということも言えそうである。「戦争や武力紛争」にしても下位概念としては，ゲリラ活動とか暗殺なども入ってくるだろうがそこを「戦争」「武力紛争」と大きく上位概念の語でまとめている。下位概念の太郎や次郎でなく上位概念の「子や孫」，下位概念の伊勢神宮や清水寺でなく上位概念の「神社や寺院」を使っているのも同じことであろう。

3.2 「と」と「や」の独立性

寺村が指摘しているように，「と」が本や映画のタイトルとして使われることが多いのも，「と」によって結ばれた語群が述語にかかっていくというより，「どのような関係にあるかを示す」独立性（まとまり性）を持つためと考えられる。

(16)　罪と罰
(17)　父と子
(18)　日本語のシンタクスと意味

(16)～(18) が「や」に変わるとどうであろうか。「と」のときより落ち着かず，だからどうしたと次の語，述語を期待したくなる。

(16)' 罪や罰
(17)' 父や子
(18)' 日本語のシンタクスや意味

次のように，「と」が「～のは～だ」文で成り立つのに「や」は少し落ち着かなく感じられるのも，「と」のほうが「や」より独立性をもつためと考えられる。

(19)　a．　きのう行ったのは西武と伊勢丹だ。
　　b．？きのう行ったのは西武や伊勢丹だ。

(19b) では，次のように続けると文が落ち着く。

(19)　b'．きのう行ったのは西武や伊勢丹であって，三越ではない。

(19b)' からわかることは，「や」は独立性が弱く，後ろにかかっていこうとすること，そして，実は，言いたいことは「〜や〜」のところではなく，むしろ後に出て来ること（ここでは「三越ではない」）であると言えそうである。

3.3 述部との関係

「すべて列挙の「や」」文を見ていくと，後ろに続く述部は，前置き文，条件文，否定文につながっていく場合が多いようである。

＜前置き文＞

(12) 日本では，むかしから，全国の神社や寺院に，庶民が絵をかいた額を奉納する習慣がありますが，……

(20) われわれは文部省や著作者の肩を持つつもりはないが……（助詞）

(21) たとえば，といっても俳句や和歌は苦手なので，なかなか思い出せないが，（日本）

前置き文は次の文を引き出すための役割をするもので，話し手が言いたいことは，次の文である。「や」の変わりに「と」を使うと焦点が前置き文に置かれてしまうため，前置き文では「や」が使われやすいのであろうか。

＜条件節＞

条件節も前置き的な性格を持つ。話し手の言いたいことはむしろ後ろに続く文である。

(10) ヨーロッパやアメリカの先進国と比べても，少しもみおとりしない……

(22) フランスやドイツが成功したのなら，日本も近代化に成功したとしても，不思議ではないでしょう。（日本）

(23) 気息の絶え絶えになっているのを発見して水やまたたびを飲ませたら一時は回復した。（猫）

(24) しかし牛乳や山羊乳が手に入らなければ，……（助詞）

(25) これは固ゆでや生はいけません。（助詞）

「や」と「と」に置き換えても意味的には大差はないようであるが，条件節

を軽く流して主節に入るという意味では「や」のほうが落ち着くと言える。

＜～のような／ように＞

「や」と結び付いてよく使われる表現としては，「～のような／ように」がある。例をあげる表現であるから「や」と結び付くと言えるが，一部列挙の場合だけでなく，すべて列挙の場合も「～のような／ように」によって婉曲に結ばれているとも言える。

(26)　それはいわば，茶道や華道のような芸能の一種として，全国の多数の塾で教授され……　（日本）

(27)　からくり人形や和時計のような，精密で繊細な機械ばかりではありません。　（日本）

(28)　私も太郎や花子のようにがん張ろう。　（教育）

前置き文，条件文などの構文的結び付きのほかに，「や」は否定的意味合いを持つ表現とも結び付きやすいのではないかとも思われる。

(11)　国際外交の慣例や術策をしらなかったため，気がついてみると，……

(21)　俳句や和歌は苦手なので，……

(29)　俳句や和歌の世界とは別に，……　（軽薄）

(30)　ヒトラリズムやプロレタリアの独裁の信奉者にとってこの書が面白くないことは当然であろう。　（助詞）

(31)　はらわたや目玉をくり抜いて口に入れたりすることは，論外である。　（軽薄）

次の作例では，「や」は否定表現におさまるが，「と」は落ち着きが悪いように思われる。

(32)　田中や山田はあてにならない。
　？田中と山田はあてにならない。

(33)　田中や山田は論外だ。
　？田中と山田は論外だ。

条件節で取り上げた(24)(25)も，条件節であるという以外に，「や」が否定表現と結び付いて，話し手の否定的な気持ちを表していると言える。ここからも「や」が話し手の心的態度，言い換えれば，ムード的な性格を持つということが言えよう。

3.4 動詞の性質

「や」をとりやすい動詞があるかどうか，例を見てみよう。次の例はいずれも「と」では置き換えにくいものである。

(34) 山椒魚は，杉苔や銭苔を眺めることを好まなかった。寧ろそれらを疎んじさえした。 (山椒魚)

(35) ただ一つ困った事にはこの僧侶のような玉にもやはり春の目ざめる日はあった。さかりがつくと彼は所かまわず尿水を飛ばして襖や器具をよごした。 (猫)

(36) その結果，岩屋の壁は水あかにまみれて滑らかに感触され，彼は彼自身の背中や尻尾や腹に，ついに苔が生えてしまったと信じた。 (山椒魚)

(37) 電車やバスをのりつぐ。 (例解)

(38) これに対して人権や自由を云々するのは，…… (助詞)

「眺める」という動作は局部的にではなく全体的にものを見る動作である。ここで「杉苔と銭苔を」眺めるとすればまず杉苔を見て，次に銭苔を見るという動作になって全体に見るという意味合いが薄れる。同じように，尿水を飛ばして「襖と器具」をよごしたより，「襖や器具」をよごしたのほうが，尿水が広い範囲に飛んだ様子がよく伝わる。「苔が生える」も「と」ならそこだけだが，「や」なら「全体に」の意味になる。「背中や尻尾や腹」と言うことによって実は，「体全体に」ということが言いたいのである。

「のりつぐ」も乗り継いだものが電車とバスだけであっても，「電車とバス」をのりつぐは言いにくい。「のりつぐ」にはいろいろなものを順々にという意味があり，「や」のほうが落ち着く。「云々する」も色々言うことであるから，「や」のほうがふさわしい。

3.5　話し手の心的態度

（4）　b．机の上に鉛筆やノートがある。
（5）　b．スーパーで人参や大根を買った。

(4b) は机の上に鉛筆とノートのほかにも何かあることを，(5b) は人参と大根のほかにも何かを買ったことを含む文，つまり一部をあげる用法と述べたが本当にそうだろうか。「N1 や N2」には並立する最後の名詞に「など」を付ける用法があり，これは明かに一部をあげる意味をもつ。

（4）　c．机の上に鉛筆やノートなどがある。
（5）　c．スーパーで人参や大根などを買った。

留学生は「や」ですでに一部をあげる機能をもつのに，なぜ「など」をつけるのかと不思議に思うようである。ここで次のような仮説をたててみたい。

一部列挙を表すと思われる「や」文（「など」のつかない (4b) (5b) のようなもの）は「すべて列挙」の可能性をもち，「や」を選ぶか「と」を選ぶかは話し手が決定する。

(4b) は通常は一部列挙と判断される（本稿でも一部列挙としてしか見てこなかった）が，話し手が机の上のもの一つ一つに焦点を置くのではなく，鉛筆とノートをひとまとめとして（文具として）みなすときには，鉛筆とノートしかなくても，「や」を使うのではないだろうか。例えば次のような言い方をされたとしても，鉛筆とノートしかなかったと言って怒る人はいないだろう。

（4）　d．机の上に鉛筆やノートがあるから，使ってください。

(5b) も買ったものは人参と大根だけでも，スーパーで買物をしたことのほうに焦点が置かれるときは，「や」を使うこともあるのではないか。

今までも「や」が話し手の必的態度にかかわることに触れてきたが，「や」は話し手のものごとのとらえ方次第で，「すべて列挙の「や」」が使われると言

えそうである。

3.6 「と」と「や」比較のまとめ

以上「と」と「すべて列挙の「や」」について見てきたことをまとめると次のようなことが言える。(以下の 1)～5)の「や」は「すべて列挙の「や」」を指す。)

1) 「や」で結ばれる語は特定のものが多い。
2) 「と」は独立的,「や」は述語への依存度が強い。
3) 「と」は格助詞的,「や」はムードの助詞的(間投助詞的,とりたて助詞的)。
4) 「と」は厳密,「や」はおおざっぱ,全体的(その例は例を言うためでなくその状況を言うためのもの)。
5) 「と」は新情報的,「や」は旧情報的。

「と」が新情報的,「や」が旧情報的ということは,「と」が格助詞の性格を持ち,「や」がムードを表す助詞の性格を持つことからもある程度は言えそうである。

次の用例は井伏鱒二の『山椒魚』の一節であるが,同じ「杉苔」「銭苔」が初出のところでは「と」が,2度目に出てくるところでは「や」が使われている。2度目の「や」は,「眺める」という動詞の意味,「好まなかった」と否定につながっていくことで使われているが,初出で出たものを,既出の語として「や」で受けたとは考えられないだろうか。

(39) 岩屋の天井には,杉苔と銭苔が密生して,銭苔は緑色の鱗でもって地所とり(小児の遊戯の一種)の形式で繁殖し,杉苔は細く且つ紅色の花柄の尖端に,可憐な花を咲かせた。(中略)
山椒魚は,杉苔や銭苔を眺めることを好まなかった。寧ろそれらを疎んじさえした。杉苔の花粉はしきりに岩屋のなかの水面に散ったので,彼は自分の棲家の水が汚れてしまうと信じたからである。あまつさえ,岩や天井の凹みには,一群ずつのかびさえも生えた。かびはなんと愚かな習性を持っていたことであろう。

次の例も，現代史資料館に何が保存されているかを「と」で説明し，それらには「残虐行為や強制収容所」のことが書かれていると「や」で説明されていると考えられないだろうか。

(40)　特筆すべきことは，大戦後すぐポーランドの教育省が全国の小学生に戦争体験の絵と作文をかくよう呼びかけたことだ。六千点の絵と数百点の作文が今も現代史資料館にきちんと保存されている。ナチスの残虐行為や強制収容所のことを子どもたちはかいている。　(天声)

4．「と」と「や」と留学生の誤用

今までの考察から，1で見た留学生の誤用は次のように説明できる。

1)「や」にも「すべて列挙」の場合があること。
2)「や」は，社会通念的な特定の語を結び付け，条件文や前置き文に使われやすく，また話し手の心的態度を表し，厳密でなく大ざっぱに言うときに使われる。

しかしこの説明だけで，外国人学習者は「すべて列挙の「や」」がすぐ使えるだろうか。彼らにとってむずかしい点は「社会通念的な特定の語」というところであろう。社会通念というのはその国の文化にかかわることであり，その国の文化がわからないときには「すべて列挙の「や」」は使いにくいということになろう。

いま一度並立助詞とは何かというところに立ち戻って，寺村の言う3つの考え方を見，留学生の「や」と「と」の誤用の問題を考えてみよう。

寺村は並立的結合，及び並立助詞に必要な考え方として次の3つをあげている。

1)　2つあるいはそれ以上の，名詞，形容詞，動詞，(名詞＋) 判定詞を，平等の資格で結び付ける。
2)　平等の資格で結び付けられたものを，全体としてその文中の1つの構成要素とする。

3) 並立助詞の用法の共通点，相違点を説明するための基本的概念は「セット(集合)」である。 (下線筆者)

並立助詞を使用するに当たって，外国人学習者に困難な点は 1)〜3) で下線を施したように，

何と何がセット（集合）になっているか。

何と何が平等の資格と言えるか。

「N1＋並立助詞＋N2」を構成要素として文法的に正しく位置づけられるか。

という点であろう。留学生の作文を通して見られる並列表現での誤用の傾向は，次のようにまとめられよう。

＜並列語のアンバランス＞

1 同じ重みのもの，同列のもの，同資格のものが並べられない。

2 「N1＋並立助詞＋N2」というとき，N1 と N2 の出し方の順序がわからない。

3 N1，N2 を並べられたとしても，表現力，文法力の不足で語の補いが必要である。

4 並立助詞を多用し，名詞をむやみに並べたてる。

＜並立助詞，並立語の問題＞

5 N1N2を結ぶ助詞，語の選択が不適切である。

＜述語との関係＞

6 「N1 並立助詞 N2」を受ける助詞や述部が不十分で正しくまとめられない。

＜並列部分の問題＞

7 「N1 と N2」「N1 や N2」が修飾語を受ける場合，またそれ自身が修飾語になって後ろにかかっていく場合，構文的に不正確になる。

次に留学生の作文を紙幅の許す限りかかげる。留学生が並立助詞「や」「と」でおかす誤りが出ていて興味深い。作文の後ろに上記の誤用の傾向の番号を対

応させておく。誤用の傾向が複数に渡る場合も多い。(→以下は並列表現を中心にした誤用箇所の，筆者による訂正を示す。)

(41) 交通や仕事や大学に入る競争はシドニー，メルボルンほどあまり大変ではない。→交通戦争や受験戦争，また職場での競争（1，4，7）

(42) 例えば，高校まで，香港の学生達は校服を着るべきだ。そして，学校の規則がきびしくて勉強と宿題もたくさんある。よい学校と大学を入学するために，たくさん勉強しなくてはならないからだ。
→予習や復習（1）　→よい学校や大学（1）

(43) 私が日本人といっしょにキャンプに行ったときに，ある朝，皆が納豆とご飯の朝食を楽しくしていた間，納豆のひどいにおいがすぐ部屋に充満した。→納豆で朝食をとっている（1，3）

(44) 経済についてやＳＦや小説を読んで，米国のフォルチュネとタイムと言う雑誌を読みました。→経済の本や，ＳＦや小説，また米国のフォーチュンやタイムという雑誌も（3，5，7）

(45) タイやマレシアと中国の東南海岸とアメリカの西海岸とハワイを行たことがあります。→タイ，マレーシア，中国の東南海岸，そしてアメリカの西海岸やハワイに（4，5，6）

(46) 新聞やテレビやラジオやビデオなどおかげで外国の生活や習慣や政府などについてよくならえます。→新聞やテレビやラジオなどの（4，7）　→外国の生活や習慣，そして政治のやり方（7）

(47) 人類は工業時代を出発して所謂情報時代に入っている。工業化がわれわれの生活の経済的や社会的な構造を変えたように，情報もこの構造を変えると思う。→経済的，社会的構造（5，7）

(48) 現在，戦争が非難されているが，我々は以前から色々な会社がイラクに兵器や軍事的な工場を売っていたことは知っていたはずだ。→軍事工場をはじめ兵器（2，3，5）

(49) ですから，現代の政治や商売の交渉がもっと早く，もっと断固になってきたのは当然の結果である。→現在行われている政治交渉や貿易交渉（1，3，7）

(50) ……よく外国へ旅行に行きます。外国人にあったり，特別の景色と建物と着物を見たり，外の生活と社会と文化を考えてみてもおもしろいだろうと思っています。→その地方固有の景色や建物をながめたり，地方の衣装を見たり，（3，5，6）　→別の生活や文化（1，5，

7）

(51) おいしい中華料理と楽しい買物をいろいろがあて有名です。→おいしい中華料理や買物も楽しめ，（1，5，6）

5. おわりに

初級の文法項目としてあまり難解なこととは考えられていない並立助詞「や」にも，話し手の心的態度と結び付いて使われる「すべて列挙の「や」」の用法のあることがわかった。「すべて列挙の「や」」では，社会通念として日本人が共通して理解している語が多く使われ，その「N1 や N2」が述語にかかっていこうとする。日本の社会・文化に未熟な外国人学習者には，この「すべて列挙の「や」」はむずかしいものにちがいない。

また，留学生の誤用が示すように，並立助詞として，同じ性質のものを，同じ資格でもって並べ，なおかつ文の中で構文的に正しく位置づけるということも彼らにはむずかしいことである。

「と」「や」という比較的小さな文法項目が，外国人の最もむずかしい面を担っているということを教える側も心しておきたいものである。

注

1) 参考文献⑪ p. 78，⑫ p. 64
2) 参考文献② p. 296-299
3) 参考文献⑦ p. 73-74
4) 参考文献③ p. 183
5) 参考文献⑤ p. 186-188
6) 参考文献① p. 197-203 以降本稿での寺村の引用は6）に同じ。
7) 用例の出典名は次のように省略する。

日本とは何か→日本	軽薄のすすめ→軽薄
猫の死→猫	天声人語→天声
現代語の助詞・助動詞→助詞	日本語教育事典→教育
現代国語例解辞典→解例	

8) 参考文献② p. 220

参考文献

① 寺村 秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
② 北原保雄他（1981）『日本文法事典』有精堂出版
③ 山田 孝雄（1922）『日本文法講義』宝文館
④ 橋本 進吉（1969）『助詞・助動詞の研究』岩波書店

⑤　時枝　誠記（1950）『日本文法口語篇』岩波全書
⑥　坂梨　隆三（1984）「助詞の分類」『研究資料日本文法⑤助辞編㈠助詞』明治書院
⑦　阿部　八郎（1985）「接続助詞」『研究資料日本文法⑦助辞編㈢助詞・助動詞辞典』明治書院
⑧　国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』
⑨　国広　哲弥（1960）「'And' と「と・に・や・も ―日英両語語彙の比較―」」『言語研究』
⑩　久野　　暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
⑪　Eleanor Harz Jorden（1987）『Japanese: The Spoken Language Part 1』
⑫　＿＿＿＿＿＿＿＿（1988）『Japanese: The Spoken Language Part 2』

出　　典

『山椒魚』　井伏鱒二
「猫の死」『寺田寅彦随筆集』　寺田寅彦
「日本とは何か」　梅棹忠夫
「軽薄のすすめ」　吉行淳之介
「天声人語」　朝日新聞
『現代語の助詞・助動詞』　国立国語研究所
『現代国語例解辞典』　林巨樹監修
『日本語教育事典』　日本語教育学会